

同志社大学  
2017 年度卒業論文

転校経験が人間力に与える影響  
—家族システムの視点から—

社会学部社会学科  
学籍番号：19151035  
氏名：長尾 真衣子  
指導教員：立木 茂雄  
(本文の総時数：20836 字)

## 要旨

論題：転校経験が人間力に与える影響  
—家族システムの視点から—

学籍番号：19151035

氏名：長尾 真衣子

今日社会でコミュニケーション能力が重要視されており、それを包括する人間力が求められる。自身の経験から転校経験が人間力に影響を与えていると考えた筆者は、ほかに人間力に影響を与えていると考えられる家族システムの視点から、転校経験が与える人間力に関して調査を行った。大学生を対象にした質問紙調査をおこない、結果をすべて数値化しSPSSを用いて分析を行った結果、男女によって転校経験が及ぼす人間力への影響が異なること、転校に対する期待が男女で異なること、転校経験で人間力が高まる家族システムが異なることが明らかになった。そして、仮説通り転校経験は人間力に影響を与えているが、プラスの影響だけではないという発見も生まれた。

キーワード：転校経験、人間力、家族システム

## 1 序論

### 1.1 はじめに

今日、社会で私たちが生きていくうえで大切なことは「コミュニケーション能力」である。このことは様々な場面、メディアにおいて言われている。就職するにあたってこのことが重要視されており、就職活動におけるセミナーで、学生が身につけるべき重要なスキルの一つとしてコミュニケーション能力が取り上げられたり、企業が採用するにあたって特に重視した点に挙げられたりするほどである。齊藤(2004)は、コミュニケーション力とは感情を互いに理解し合い、意味を互いに理解し合う能力、感情面に気を配って、意味を分かち合い信頼関係を築いていく能力であると定義している。一方で世間一般では、コミュニケーション能力とは初対面の相手に対しても人見知りせずに積極的に上手くコミュニケーションをとることのできる能力という認識もされている。そもそもコミュニケーション能力の土台は人間のどの段階でどのように身につくのだろうか。私はそれを子どもの時の「見知らぬ他人と初めて会う経験」が大きいのではないかと考える。子供ながらに試行錯誤して見知らぬ他人と人間関係を構築する。それを重ねることでやがて力となり身につくのである。そう考えると、初対面の人間とコミュニケーションをとる機会が自然と多くなる、両親が仕事上全国転勤している家庭（以下：転勤族とする）の子どもはコミュニケーション能力、つまり社会で必要とされている人間力がより高くなるのではないだろうか。今回私は転校を家族にとってのひとつの社会変動と捉え、それに適応する家族とその子どもの新しい学校への適応について調査する。

その結果として、子どもときの転校経験と人間力の関係を明らかにする。そのうえで、転勤族におけるマイナスなイメージを払拭し、転校経験がもたらす人間力向上の可能性を見出すことを本稿の最終的な目的とする。

本稿の構成として、まず研究背景と本研究の意義を筆者の実体験をもとに説明する。そののち、本研究で用いる理論であるルーベン・ヒル、ハミルトン・マッカバンの『家族ストレス論』(石原 2008)における「ABC・Xモデル」(ヒル 1949：石原 2008)を本研究のために改良し新たに作成したモデルを提示し、先行研究に付け加える。加えて、調査を行うにあたって従属変数となる「人間力尺度」のもとになった「ヒューマンスキル」(西村拓真, 2017)の説明を行う。そののちそれに基づいて実施した調査から、結果を分析し、考察、結論へと展開していく。

### 1.2 研究背景と意義

転校とは、家族という一つの集団にとって大きな社会変動である。この社会変動とは、人がよりどころとし、自己定日常の関係を変え、相互作用と社会的絆とに問題を生じさせることである(グレン・エルダー, 1997)。筆者は父親の転勤により転校を3回経験している。そのなかで東京都23区内、横浜、高知を経験しているため方言という言葉の壁や、その土地特有の人間性や遊び場、商店等の環境の違いに驚き悩むこともあった。そのため転校が決まるたびに新しい学校への期待と不安を抱いていた記憶がある。しかしそれ以上に記憶に残っているのが引っ越した際の家族の対応であった。転居先の社宅で引っ越し作業をしている中で、誰かが作業をしている私たちの前を通るたびに父が挨拶に行き、それに母、兄、私も追いかけて同じように挨拶をした。社宅であるということも大きな要因の一つではあ

るが、何棟もある社宅で違う棟の人間にも挨拶をしていたのが印象的であった。また、引っ越すたびに買い物をする近所のスーパーや週末に家族で出かけるスポットが一変して飽きることがなかった。私はこの初対面の相手にも積極的に挨拶をするということが当たり前になっていたせいか、あまり初対面の人間を怖いと思っただことがない。一回目の転校では新しい生活への期待感よりも友人と別れるさみしさや新しい学校でうまくやっけていけるのかという不安のほうが圧倒的に大きかったが、3回目には自己紹介で何を言おう、次の学校も給食が美味しかったらいいなあなどと余裕を持っていたほどである。こうした私の心境の変化、そして人見知りをしない要因は転校の経験にあるのではないかと考える。一度でも「多くの見知らぬ他人と接し、人間関係を構築する」という経験を経ることで、経験のない人に比べて、初対面の人間に対しても恐怖や緊張を感じることなく接することができるのではないだろうか。

私の仮説は、両親の転勤に伴う子どもの転校経験は子どもの人間力に影響を及ぼすということである。これは、ルーベン・ヒル、ハミルトン・マッカバンによる家族ストレス論を基礎にしている。家族ストレスとは、ある生活パターンを形成している生活システムとしての家族に、なんらかの刺激要因が加わることによって、従来の生活パターンがかく乱され、既存の対処様式や問題解決方式では平衡を維持できない状態に至る状況、さらにそこから立ち直ろうとする努力とその結果までを含む過程のことである(石原 2000)。今回は両親の転勤に伴う転居を家族に対するストレス資源として考える。

「転校」「転勤族」という言葉に対してのイメージは両極端のように思える。筆者はいわゆる転勤族であるが、転校に慣れるにしたがって新しい土地での生活が新鮮で魅力的に感じ、その土地の人や自然、特産品との出会いが楽しく転校に対して悪いイメージを持つことがない。それどころか、転校によって初対面の人間とのコミュニケーションや住む地方による方言の違いに慣れているため、転勤族の家庭に生まれよかったと思うほどである。一方で、筆者と同じく転勤族であった友人は、毎回環境や人間関係がリセットされるので友達関係も浅くなり、毎回の自己紹介が苦痛であった。そのため将来は転居の伴う転勤のない一般職を希望すると言う。またインターネットで「転勤族 イメージ」と検索すると「家族の関係が密になる」「子どもが社会的になる」などプラスの言葉に比べて「かかる費用が多く貯金ができない」「子どもがかわいそう」「主婦へのストレスが大きい」などマイナスな言葉の方が多く書かれている。加えて「転勤族やめたい」や「転勤族の男性と結婚して後悔している」という言葉が多く見つけられたのに対し「転勤族でよかった」「幸せ」という言葉はほとんど見られなかった。私はこの調査を通して、転勤族に対するイメージが少しでもよくなることを望む。

## 2 先行研究

### 2.1 家族システム

#### 2.1.1 タルコット・パーソンズの研究

家族とは、子どもが初めて所属する集団である。タルコット・パーソンズは、近代社会において核家族の重要な機能は子どもの社会科と成人のパーソナリティの安定化である(石原 1985)と論じた。社会科とは、社会システムに制度化されている文化を個人の性格、個性に内面化していく過程である。パーソンズは社会システムの統合と安定を目指し、核

家族という形態と、そこでの夫婦間の性別役割分業を産業化の進行した近代社会に適した家族構造とみなしていた。核家族とは夫婦あるいは夫婦とその未婚の子どもからなる小家族であり、性別役割分業とは、夫が外に働きかけて家族に必要な資材を調達する役割、妻が家庭内に留まり家族員のストレス解消に努め、一体化をはかる役割を遂行するということである。この主張に対して、女性の社会的・経済的・政治的権利の拡張と性差別からの解放を目指すフェミニズムの立場から、保守傾向の強い家族論として批判された。さらに、家族システムの維持、存続にとって機能的であることが正常であるとみなされるために、ひとり親家族は社会的機能を十分に果たせない“欠損家族”であるというマイナス評価につながる恐れがある。今日ではパーソンズの家族論はほとんど顧みられることはなくなったが、子どもの社会化が核家族の重要な機能であるという視点は社会全般にも広く受け入れられている。今回筆者は核家族に限定することはしないが、家族の行動、家族成員同士の関係も子どもの人間力に少なからず影響を与えると考える。

まず、システムとしての家族が存在する。家族は、それを構成する単位としての家族成員が、それぞれの情報、資源を処理しながら相互に関係しあう一つの集合体であり、全体として特徴的なパターンを形成していると捉えるなら、家族を集合体レベルの社会システムとみなすことができる(新・中野 1981)。こうして家族を社会システムとしてとらえることの意義は、家族のシステム分析を行えることである(宮本、清水 2009)。一つのシステムとして家族を分析することで成員同士の関係性、家族としての課題が発見され、そこから課題解決に取り組むことが可能となる。しかしながら、現代家族のシステム分析を行う上でいくつか留意すべき点がある(神原 2001)。第一に、家族システムの成員にとって、家族の維持、存続が最重要課題とは限らないことを認めることである。第二に、家族システムの成員だからといって、家族の課題達成のために無条件に貢献するとは限らず、一人一人の成員は家族のみと関わっているわけではなく、あくまでも家に部分的に貢献する存在として理解しておくことである。第三に、家族システムの成員といえども、運命的に家族に関わるとは限らず、自己の何らかの生活欲求の充足を期待してその家族に所属している場合が少なくない、そのために、個々の成員を自己本位的で時には自分の利益だけを求める場合もある存在とみなすことである。第四に、家族システムを構成する成員間で意思や期待が常に一致するとは限らず、それどころか、常に調整しながら最低限の合意形成を行って家族の統合をはかることを組み込んだ分析が可能になる。今回は家族を一つの小集団、そしてシステムと捉え、どのように転居に対処していくかを調査、分析する。

### 2.1.2 円環モデル

家族機能に関して理論的・実証的な研究を進めてきたデイビット・ハーマン・オルソンは「きずな (cohesion)・かじとり (adaptability) の両次元が家族機能を決定する上で中心的であると主張し、この2つの次元を組み合わせて結婚・家族システムを16タイプに分類する円環モデル (Circumplex model) を発表した。このモデルをもとに「現前の家族がなぜそのようなふるまいをするのかを説明する」(立木茂雄 2015) ため、標準的な家族機能評価尺度が開発したのが立木である。円環モデルはきずなとかじとりの2つの次元が作る空間上で、家族システムの機能度を診断評価することができる。

円環モデルにおける「きずな」とは、「家族の成員が互いに対して持つ情緒的結合」と定

義され、情緒的結合、境界、連合、時間、空間、友人、意思決定への参加、趣味とレクリエーションなどの変数から測定される。成員が持つ情緒的ベクトルには2つの方向性が存在する。1つは内向き、つまり家族を感情的に同一化させ、きずなの極端に強い段階（ベッタリ）に追い込むものである。もう1つは外向き、つまり家族の成員を家族システムの外に追いやり、きずなを極端に弱い段階（バラバラ）に追い込むものである。この2つのベクトルのバランスが取れた状態（ピツタリとサラリ）のときに家族システムはもっともうまく機能し、個人の成長も促進されると考えられる。しかし健康的でバランスのとれた家族といっても、きずなが常に中庸な状態であるのではない。その家族が直面する状況的ストレスや発達的变化に応じて家族の関係性を変化させることができ、その変化の幅が広いと考えられている。一方できずなが極端な家族は、情緒的な関係性が固定されているため、長期的にみると問題が発生しやすいと考えられるのである（立木 2015）。

円環モデルの「かじとり」とは、「状況的・発達のストレスに応じて家族（夫婦）システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力」と定義され、家族の権力構造（自己主張や支配）や交渉（話し合いや処理）のスタイル、役割関係、関係規範などの変数から測定される。きずなと同様かじとり次元の真ん中の段階（キツチリと柔軟）が最も健康な家族システムであり、そこではコミュニケーションを通じてお互いが言いたいことを言え、リーダーシップは民主的であり、交渉をうまく進めることができる。また、役割を共有し、必要な時には新しい役割もつくり、きまりはすべて家族みんなに明快に示されている。一方でかじとりが極端な家族は家族システムが非機能的であり、融通なしやてんやわんやといった不安定な状態である（立木 2015）。

円環モデルとはきずなとかじとりの次元が作る空間上で、家族がこの空間の中央部分に布置されれば健康であり、逆にきずなもかじとりも極端で、空間の辺縁部分に布置された場合、問題が生じやすいと考えられる。極端型の家族タイプが、図の辺縁部分に円環（Circumplex）状に布置されることから「円環モデル」と名づけられた（立木 1999）。

## 2.2 家族ストレス論

家族はストレスの緩和の場である一方で、ストレス発生のある場でもある。今回は転居という家族にとっての社会変動を一つのストレスとして捉え、家族ストレス論に基づいて調査を行う。家族ストレスにおける研究は、はじめルーベン・ヒル(1949)によって行われた。ヒルは第二次大戦の出兵兵士の家族の戦時離別と再統合の危機への適応についての研究を二つのモデルを用いて行った。一つは「ABC・Xモデル」である。これは、なんらかのストレスを引き起こすような出来事、つまりはストレスイベントであるA要因は、家族の対応する手立て（資源）であるB要因や出来事に対する家族としての意味付けのC要因が相互作用してX（危機状況）をもたらすというモデルである。つまり、Aの出来事がそのまま家族に危機状況をもたらしているわけではないことを示している。ここでの家族資源とは、家族の適応能力や凝集性、過去に同じ危機を乗り切った経験などが挙げられる。一方で家族の意味付けとは、その出来事を家族の存在や目標に対して脅威と捉えるか否かということである。そのため、同じ困難さをもつ出来事が起きた場合でも、ある家族は壊滅的なダメージを受けるのに対し、ある家族は大きな傷を受けずに立ち直り通り抜ける。そしてこのモデルは、家族ストレス事象をそれにかかわる要因間の規定関係を確立させる

ことで法則性の把握に近づこうとする観点が現れている。

もう一つの理論モデルは「ジェットコースター・モデル」(ヒル 1949 : 石原 2008) と呼ばれるものである。これは集団としての家族が危機に遭遇した際に、組織解体、回復、再組織化という経過をたどって適応していく過程を図式化したモデルである。横軸における時間軸の中で、縦軸の家族の組織化の水準が上下する様子が、遊園地のジェットコースターに似ていることからこのように命名された。家族集団としてのあり方を全体的に捉え、その状態の変化を跡付けようとする考え方に基づくものである。家族という一つの小集団が安定状態からストレスとなる出来事に出会うことにより、それまでの組織状態が壊れ通常の働きが不可能な状態に陥る。この状態が「組織解体」であり、この集団に危機的状況を生じさせる。しかしここから均衡化への作用が働いて回復し、もとの安定状態に達するという規則性をこのモデルは強調しているのである。このような二つの理論的な基礎付けによって、家族研究の中に家族ストレス論という研究領域が成立していったのである。

以上のようなヒルのストレス論をさらに発展させ、分断された二つのモデルを統合させることで家族のストレス過程の全体を射程に入れたものがマッカバンによる二重 ABC・X モデルである。これは、家族危機発生までを前危機、危機発生以後の再組織化までを後危機という二つの連続する局面であると位置づける。前危機ではヒルの ABC モデルがそのまま適用される。そして、この後危機という過程においてもヒルの提唱した ABC・X モデルの要因関連が見られるという視点から二重 ABC・X モデルと命名されたのである。ここではストレス下の家族は、ある主要なストレスとなる出来事が生じた後に、ストレスの累積を経験することによっていっそう困難さが加重され、事態は深刻化することが認められている(石原 2006)。このストレスの累積の現れ方として、三つのパターンが挙げられる。一つ目に、「当初の出来事自体に内在する困難性 (hardship) が、時間の経過の中で加重されてくる」時である。祖父の病気の症状が悪化し死に至ることなど、はじめストレスとして出てきた出来事の状態がさらに悪化し家族にその加重が圧迫してくることが例として挙げられる。二つ目は「当初の出来事が未解決なうちに、これとは別個の出来事が重ねて起きる場合」である(石原 2006)。寝たきりの父親の介護に迫られている間に子どもの受験が重なるなど、新たな困難が別に発生することである。そして三つ目が「危機への対処行動それ自体がストレスとして加重される場合」である。家計の圧迫を回避するために母親が外に働きに出ることによって家族関係が悪化するなど、問題解決のための行動が新たな問題を生みだしてしまうことが挙げられる。そしてこの結果の最終変数は「家族適応 (family adaptation) とされる。マッカバンはこれを「メンバー個人対家族、家族対コミュニティの双方レベルでの機能のバランスをとろうとする家族の諸努力を反映する一連の結果」と定義している。適応はプラスとマイナスの極を持った連続体と示されており、適応と不適応の二種類がある。プラスの極は「良好適応 (bonadaptation)」と呼ばれ、次の三点の家族機能水準における平衡状態として特徴づけられる。それは、①家族統合の維持または強化、②成員の発達と家族単位としての発達の双方の持続的推進、③家族の自立性と環境の影響を統御できるという感覚、の 3 点である。反対に連続体のマイナスの極に置かれるのが家族の不適応 (maladaptation) である。これは成員対家族、家族対コミュニティの双方のレベルでの家族の機能性の持続的な平衡失調、つまりバランスの崩れた状態、あるいは双方のレベルで平衡は保ったとしても、次の三点で代償を払わなければ

ならないような状態である。これは適応と対照的に①家族統合の低下、②メンバーの個人的発達、または家族ユニットとしての発達の切り詰めや低下、③家族の独立性と自立性の低下または喪失、であり以上の3点で代償を払う状態が見られれば不適応であるといえる。以上がマッカバンによる二重 ABC・X モデルである。今回の調査では、この二重 ABC・X モデルを用いる。

次いでウェズリー・バーやシャーリー・クラインらは、ストレス状況下における家族の変化過程を調査した(石原 2006)。問題状況を抱える 82 例の家族のデータから、家族のシステム変動を三つの水準に分けた。第一の水準は行動パターンや情報の変換システムにおける変化であり、家事分担の変化や儀礼的な活動や行事の部分的な変化などである。第二の水準は、ルールを定めるルール、あるいはルールを変更する際の方法についてのルールの変化である。これは家事分担を変化させる際において、家事役割として何がどのように位置づけられるのか、その枠組み自体の見直しの段階である。最終的に第三の水準では基本価値のレベルでの変化がみられる。人間観として性善説と性悪説のどちらをとるか、人生は公正か否かといった、容易には変化しない価値観や道徳観にかかわる部分である。反対に、そうしたところまで変化を及ぶような事態は家族にとって重大なストレスを伴うといえる。

この変化過程モデル化はマッカバンも行っている。二重 ABC・X モデルで前危機とされたストレスから受けるプレッシャーに対し、システムのあり方を変えずにそのまま乗り切ろうとする努力を「順応」、システムの変化を伴って対応していくものを「適応」と区別する。順応や適応をすることでシステムの再定義やそれに基づくルールの変更がなされ、それによって役割が再配置される。この状態が「再構造化」である。しかしシステムの基本構造が変わるといっても、それが安定状態になるには様々な段階を踏む必要がある。再構造化において生じたルール、役割などの変更がメンバーの一部のみにおいて認められるのではなく、すべてのメンバーに波及、認識が共有され、変更や再配置を受け入れて、かつそれをスムーズにこなせるようになることが求められる。また再構造化で生じた基本的な変化とそれに連動するシステムの他の部分との整合性が十分にあるかどうかということも、ストレス状況を乗り越えるための重要なステップであるとされる。このステップが「統合強化」といわれる。そうして危機を再構造化、統合強化することでシステム全体が良好適応もしくは不適応を迎える。これをマッカバンは「適応のサイクル」と命名し、対応の失敗は前の段階への逆戻りループを描くという形で表している。

### 2.3 転校経験の影響に関する心理学的研究

長崎大学の原田純治、山城健(2007)によって、「転校経験とソーシャルスキル・自己効力感の関連についての調査がおこなわれている。これは、大学生を対象にした転校経験と、回答者の特性的自己効力感を聞いている質問紙調査である。自己効力感とは、「社会学理論あるいは社会学的認知理論 (Bandura 1977) に中核をなす概念の 1 つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知」(成田健一 1955)を指す。なお、この調査で聞いている転校経験とは経験の有無、経験の時期(小学校、中学校、高



等学校の3段階)、そしてその回数である。

この調査の結果、転校経験の自己効力感に与える影響は男女間で異なっていることがわかった。男性は女性に比べて特性的自己効力感が低下しやすく、転校先の新しい環境に適応する力が低下する傾向がある。その一方で女性は転校を経験、さらにその回数を重ねるにつれて特性的自己効力が高まり、新しい環境への適応に自信を増加させる傾向がある。また、ソーシャルスキルにおいては、それを構成する要素のひとつである「主張スキル」においてのみ関連が見られている。

この研究では自己効力感と転校経験の関連を調査しているが、回答者の家族システムという背景は考慮されていない。そこから筆者は、転校経験と人間力、くわえて家族システムの関連を調査していく。

### 3 調査方法

#### 3.1 調査対象者・時期

この調査においては質問紙調査をおこなった。同志社大学を中心として、関西地域の大学生を対象に、彼らの小学校時代における転校経験、人間力、家族についての質問紙を配布し、回答してもらう。配布数と回収票は同じく78票であり、そのうち回答に不備のみられた2票を除外した有効回答数が76票（有効回答率97.4パーセント）である。また、調査は2018年10月29日～11月20日おこなった。なお、調査票には、調査の趣旨や調査データの使用目的、そしてこれらのデータから個人は特定されないことなどを明記して調査した。

#### 3.2 調査対象者の属性

性別は、男性34人（44.7パーセント）、女性42人（55.3パーセント）であり、平均年齢は20.33歳であった。

#### 3.3 調査内容

今回調査をするにあたって原因となる独立を子どもの転校経験の有無、そして結果となる従属変数を回答者本人の現在の人間力と設定する。調査内容は人間力に対する項目25項目、基本属性に対する項目が2項目、転校経験に関する項目が9項目、家族のきずな・かじとりに関する項目が2項目である。人間力に関する項目については、創造性について、批判的思考・問題解決・意思決定について、学び方の学習・メタ認知について、コミュニケーション能力について、能動性についての各5項目の質問を設けた。この尺度は、立木ゼミの卒業生である西村拓真氏が作成した「ヒューマンスキル」の尺度を用いたものである。25項目それぞれに得点の高いものから、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の回答項目が設けられており、回答者が回答した得点をすべて足し合わせた合計点が高いほど、人間力をつくっているそれぞれの分野の力、あるいは全体的な人間力が高いといえる。基本属性に関する項目は、回答者の性別、年齢に比べ本調査のテーマである転校経験の有無についての質問を設けた。また、今回転校経験については、一番機会が多いであろう小学校の転校に限り聞いている。

家族のきずな・かじとりに関する項目については、Olson が発表した「結婚・家族システムの円環モデル (Circumplex Model of Marital and Family Systems)」(Olson 1979) をもとに立木茂雄が作成した、「家族システム評価尺度 (FACESKGIV - 16)」(立木 2009) を使用する。

これらの質問から得られた回答はすべて統計解析ソフトの SPSS を用いて分析を行った。

### 3.4 人間力の定義づけ

本研究における調査で用いた人間力に関する質問に関して、筆者は西村拓真氏の用いた「ヒューマンスキル」の尺度を用いた。以下では、西村の規定した「ヒューマンスキル」を構成する「ポスト近代型能力」、「21 世紀型スキル」、「EQ」の 3 つの概念の説明を行っていく。

#### 3.4.1 ポスト近代型能力

ポスト近代型能力とは、本田由紀(2005)が規定した能力の概念である。これまで社会で求められていた能力とは、「近代型能力」といった、いわゆる「基礎学力」といった試験の点数などの、個人間の比較が可視化できるものであった。個々人がどれほど順応的にふるまえるか、または同質性の高い文化や規範を共有する集団に対して協調的であることが期待された。一方で「ポスト近代型能力」とは、新しい価値を自ら創造、変化に対応・生み出すことである。それぞれ異なる個人間で柔軟にネットワークを形成し、その時々が必要に応じて他者を活用するスキルをもつことが重要であり、個々人の生来の資質、または成長する過程における日常的・持続的な環境要件によって決まる部分が大きいと本田は述べている。つまり、質的な家族との日々の何気ない相互作用という側面が「ポスト近代型能力」の形成にとって重要な役割をしめているのである。このことから本研究では、人間力と家族システムの関連も調査する。

以下は本田が規定した「ポスト近代型能力」の内容である

。

(表 1. 本田 2005、表序 - 1 「多元化する能力と日本社会」)

「ポスト近代型能力」
「生きる力」
多様性・新奇性
意欲・創造性
個別性・個性
能動性
ネットワーク形成力・交渉力

\* 「生きる力」とは、「確かな学力」(知識・技能に加え、自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力)、「豊かな人間性」(自らを律しつつ他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など)、「健康・体力」(たくましく生きるための健康や体力) を総称したもの。(学習指導要領)

西村(2017)はこの「ポスト近代型能力」の下位尺度が日本の高校生に用いられたもので

あることから、この尺度を軸にほかの類似する概念と比較しつつ精査している。その、大学生の能力測定のために比較すべき2つの概念が「21世紀型スキル」と「EQ」である。

### 3.4.2 21世紀型スキル

以下では、西村が整理したP. グリフィン・B. マクゴー・E. ケア(2014)の共著、『21世紀型スキル——学びと評価の新たなかたち』(2014)における21世紀型スキルの概念と評価尺度を説明する。西村によると、21世紀型スキルとは、「21世紀のグローバルな知識基礎社会の中で必要とされる能力であり、これからの教育で育成されることが期待される21世紀を生きぬく力」(西村 2017)である。この考え方からKSAVEモデルがATC21sにより定められた。KSAVEモデルとは、Knowledge、Attitude、Values、Ethicsの頭文字をとったものであり、以下のように4領域10スキルを定義したものである。

(表2 P. グリフィン・B. マクゴー・E. ケア 2011、KSAVEモデルを表の形にしたもの)

21世紀型スキル	
創造性とイノベーション	思考の方法
批判的思考、問題解決、意思決定	
学び方の学習、メタ認知	
コミュニケーション	働く方法
コラボレーション	
情報リテラシー	働くためのツール
ICTリテラシー	
地域とグローバルの良い市民であること (シチズンシップ)	世界の中で生きる
人生とキャリア発達	
個人の責任と社会的責任 (異文化理解と異文化適応能力を含む)	

ここから西村(2017)は「創造性とイノベーション」、「批判的思考・問題解決・意思決定」、「学び方の学習・メタ認知」、「コミュニケーション」、「コラボレーションとチームワーク」についてそれぞれ操作的定義を設定したり下位概念を示したりして評価基準に置き換えた。一方で、「21世紀型スキル」には情報リテラシーとICTリテラシーなど、働くためのツールと呼ばれる項目が存在しているが、本稿においては「ポスト近代型能力」や後述の「EQ」に対応する項目が存在しないため、測定すべき項目として扱わない(西村 2017)ものとした。

### 3.4.3 EQ

以下では、ダニエル・ゴールマン(1996)の著書の和訳である『EQ——こころの知能指数』(1996)におけるEQの概念を西村がまとめたものを説明する。EQとは、ダニエル・ゴールマンが唱えた感情の知性を数値化する概念であり、情動知能やこころの知能指数と呼ばれる。このEQを構成する5つの要素を整理したものが以下である。

(表3 西村 2017)

①自己認識 自分の気分、感情、欲動と、これらが他者に与える影響を認識し、理解する能力
②自己規制 破壊的な衝動や気分をコントロールあるいは方向転換する能力。行動する前に考えるため、判断を先送りする性向。
③動機づけ 金銭や地位以上の何かを目的に、仕事をしようとする情熱。
④共感 他者の感情の構造を理解する能力。 他者の感情的な反応によって他者に対処する能力。
⑤社会的スキル 人間関係のマネジメントとネットワーク構築における熟練。 合意点を見出し、調和を築く能力。

これらを見ると、「21世紀型スキル」と同様のカテゴライズがされていることから、これまで述べてきた西村は「ポスト近代型能力」、「21世紀型スキル」と合わせて3つの「能力」の定義について改めて比較、統合を行い、調査項目として有用な形になるように定義の操作を行ったうえで今回の質問項目を作成した。

### 3.4.4 人間力の定義

今回行う調査では、前に述べたように西村の用いた「ヒューマンスキル」の定義、尺度を用いる。これは、これまで説明してきた3つの能力の「共通概念のみを採用したものを昨今求められる「新しい能力」と定義」（西村 2017）したものである。下図は同様の内容をもつ能力定義を5つの項目として西村が整理しなおしたものである。

（表4 西村 2017）

	ポスト近代型能力	21世紀型スキル	EQ
心的知性	多様性・新奇性	批判的思考・問題解決・意思決定	自己認識
	創造性	創造性とイノベーション	自己認識
	個性・個性	学び方の学習・メタ認知	自己規制
	能動性・意欲		自己規制、動機づけ
対人能力	ネットワーク形成力、交渉力	コミュニケーション、コラボレーション	共感、社会的スキル

今回使用した西村の調査項目は、3概念を基本として「創造性」、「批判的思考・問題解決・意思決定」、「学び方の学習・メタ認知」、「コミュニケーション能力」、「能動性」の呼び方で規定されている。以上の能力定義を踏まえた詳しい質問項目は以下である。

（表5 本研究で用いた質問項目）

変数	項目	項目内容
創造性・イノベーション	問1	①アイデア創造のためにいろいろな技術をどの程度知っているか
		②アイデアを受け入れられやすい形で表現する方法をどの程度知っているか
		③自らアイデアを生み出すことができるか
		④新しいアイデアにどの程度偏見を持たないか
		⑤失敗を成功とどの程度みなすか
批判的思考・問題解決・意思決定	問2	①意見においてどの程度根拠を重要視するか
		②相反する意見を受けて自分の意見を再評価するか
		③学習の経験や過程をどの程度批判的に振り返るか
		④知的好奇心がどの程度強いのか
		⑤どの程度偏見なく公平な精神を持つか
学び方の学習・メタ認知	問3	①自分の能力の強みや弱みをどの程度知っているか
		②進路決定がキャリアに与える影響をどの程度知っているか
		③集中力にどの程度自身があるか
		④自分を高めようとする意欲がどの程度強いのか
		⑤学習に対してどの程度前向きか
コミュニケーション	問4	①会話中の話す・聞くタイミングがどの程度わかるか
		②自分の長所と短所をどの程度認識しているか

ン能力		③目標のために他人を動かすことをどの程度厭わないか
		④ことなる考えや価値観にどの程度偏見なく応答するか
		⑤他者に対する責任感がどの程度強い
能動性	問5	①取り組んだことがないことに対してどの程度積極的か
		②自分からどの程度進んで発表するか
		③みんなのためならその仕事を受け入れる
		④目標達成のために努力を惜しまない
		⑤目標設定の際、慎重に達成できそうなものにする

### 3.5 家族のきずな・かじとりに関する質問

この尺度は、Olson の円環モデルをもとに「きずな」を「家族の成員が互いに対して持つ情緒的統合」(立木 1999)、「かじとり」を「状況的・発達のストレスに応じて家族(夫婦)システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力」(立木 1999)と定義し、「日本の社会や文化に適合させるために、オリジナルに項目 (Original items adaptive to Japanese Families) を作成し、実証的な項目分析を経て作り上げた」(立木 2009) 日本版の円環モデルである。それぞれ 8 つある選択肢からあてはまるものを 1 つ選択する形式となっている。

### 3.6 転校経験の意味づけに関する項目

本調査では、転校を経験したことのある人々が転校をどのように意味づけしたかを調査するため、独自の質問項目を作成した。それは、両親などから転校を知らされた時の感情についてである。筆者が今回転校の意味づけに繋がると考えた要素は「現在の友人との離別」、「他者との出会い」、「居住環境の変化」、「新しい生活への期待」の 4 つである。この要素それぞれにプラスの感情、マイナスの感情のどちらが対応するかを聞くために 2 つずつ質問を設けた。なお、回答の際は「どちらでもない」という回答を避けるため「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 つのうち自分の感情に一番近いものをひとつ選択してもらう形式を採用した。

## 4 分析方法

ここでは、調査で得られたデータの分析方法について述べていく。まず「人間力」に関する項目については、「あてはまる」を 4 点、「どちらかといえばあてはまる」を 3 点、「どちらかといえばあてはまらない」を 2 点、「あてはまらない」を 1 点として扱い、その点数をそれぞれの尺度ごとに足し合わせた合計得点を、回答者個々人のそれぞれの尺度得点とした。つまり、これらそれぞれの合計点が高い人ほど、人間力を構成する分野の力、あるいは全体的な人間力が高いということである。

「家族のきずな」「家族のかじとり」に関しては、立木の「家族システム評価尺度 (FACESKGIV - 16)」に従って、下図のようにそれぞれの 8 項目を 4 つの水準に振り分けていく。上記の作業をおこなったのち、SPSS によって分析、考察をしていく。

(表 6 本研究で用いた家族システム評価尺度に関する項目)

「家族のきずな」	
家族はお互いのからだによくふれあう	ベッタリ
誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	
悩みを家族に相談することがある	ピツタリ
休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	
たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	サラリ
わが家では、子どもが落ち込んでいるときは親も心配するが、あまり聞いたりはしない	
家族の間で、用事以外の関係は全くない	バラバラ
家族とは必要最小限のことは話すが、それ以上はあまり会話がな	
「家族のかじとり」	
困ったことが起きたとき、いつも勝手に判断を下す人がいる	融通なし
問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見が通る	
家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	きっちり
家の決まりはみんなが守るようにしている	
問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	柔軟
わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	
わが家ではみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	てんやわんや
わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	

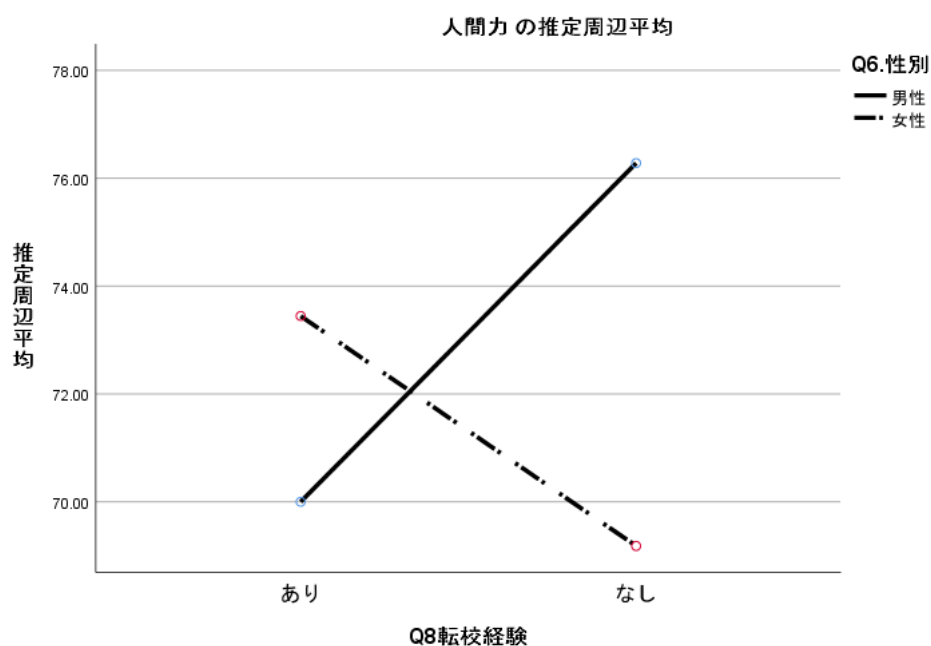
## 5 調査結果

今回は転校経験と人間力の関連の分析においては独立変数である「転校経験」も従属変数である「人間力」も質的変数であることから、一変量の分散分析をおこなった。そして、転校経験の評価に関する分析はクロス集計をおこなった。このなかで有意差が見られたものを結果として挙げていく。

### 5.1 転校経験による人間力の影響

(表 7 転校経験と性別の人間力に対する相互作用における分散分析の結果)

被験者間効果の検定					
従属変数: 人間力					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
Q8 転校経験 * Q6. 性別	362.734	1	362.734	5.046	0.028



(グラフ 1 人間力得点と転校経験・性別の相互作用)

まず先行研究をならって、人間力全体に与える転校経験と性別の影響を分析した。その結果、「転校経験と性別」の交互作用に 5%水準で有意差がみられた ( $F(1, 71)=5.046, p<.05$ )。

このグラフが示すように、先行研究と同様に女性は転校をすることで人間力が高まり、男性は経験をすることで人間力が低下する傾向があることが読み取られる。



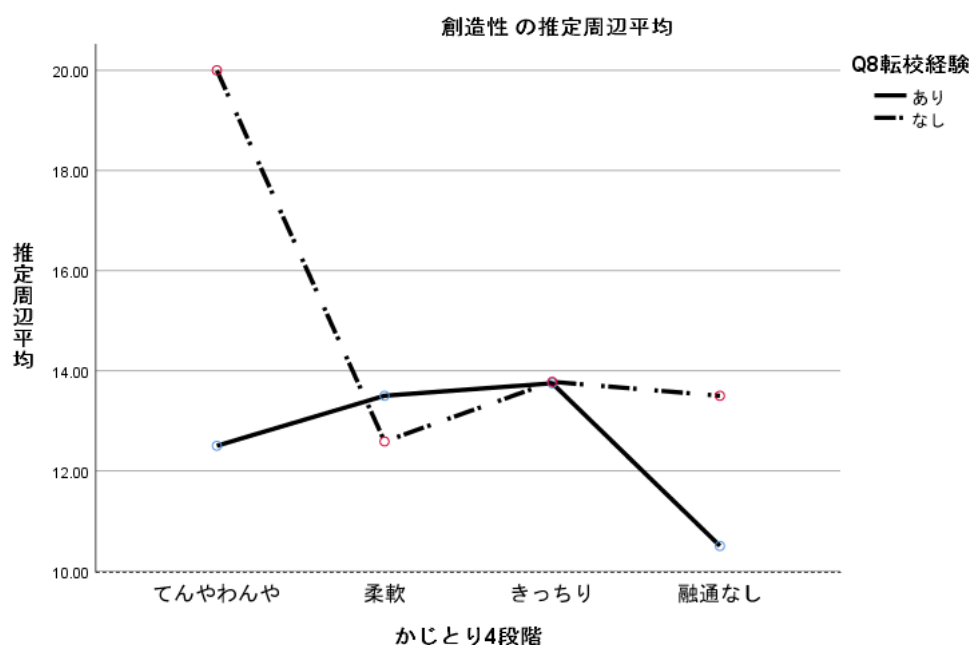
## 5.2 転校経験が影響を及ぼす人間力の構成要素

つぎに、人間力を構成する要素それぞれに与える転校経験と家族システムの影響を分析した。以下ではその中で、「転校経験と家族システム」の交互作用が見られたものを述べていく。

### 5.2.1 創造性得点

(表 8 転校経験と家族のかじとりの創造性に対する相互作用における分散分析の結果)

被験者間効果の検定					
従属変数: 創造性					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
Q8 転校経験 * かじとり 4 段階	63.603	3	21.201	4.853	0.005



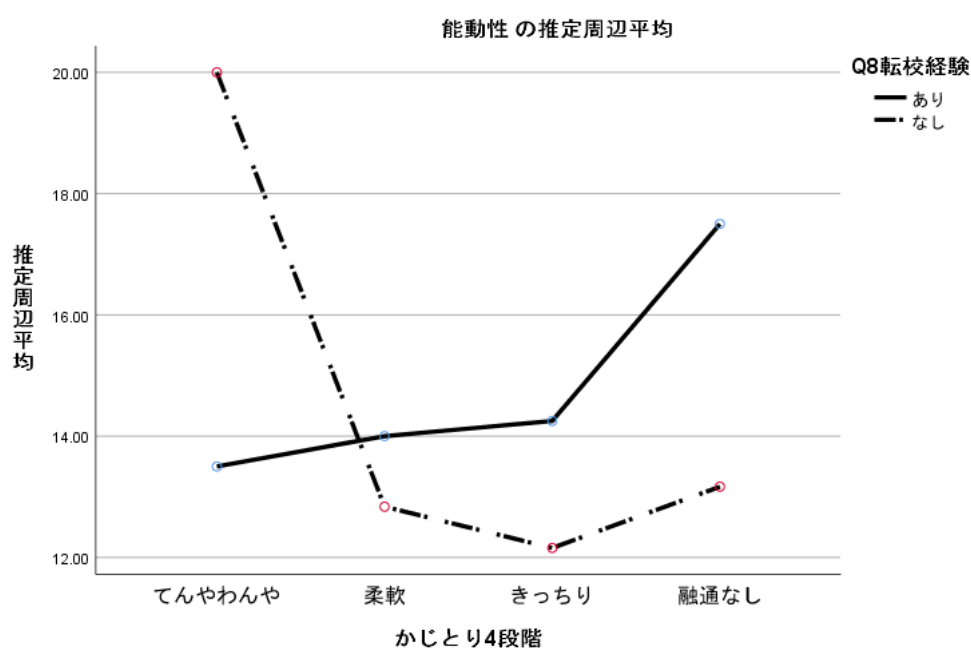
(グラフ 2 創造性得点と転校経験・家族のかじとりの相互作用)

創造性得点に関して、「転校経験・家族のかじとり」の交互作用に 5%水準で有意差がみられた ( $F(3, 53)=4.853, p<.05$ )。グラフが示すように、転校経験のない人々は家族のかじとりがてんやわんやであるほど創造性が増加するのに対し、転校経験のある人々は家族のかじとりが融通なしであるほど低下する傾向があることが読み取られる。両者ともかじとり次元が中庸である人々の創造性得点に差が見られないことから、この結果の信用性は高いといえる。

## 5.2.2 能動性得点

(表 9 転校経験と家族のかじとりの能動性に対する相互作用における分散分析の結果)

被験者間効果の検定					
従属変数: 能動性					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
Q8 転校経験 * かじとり 4 段階	57.003	3	19.001	3.284	0.028



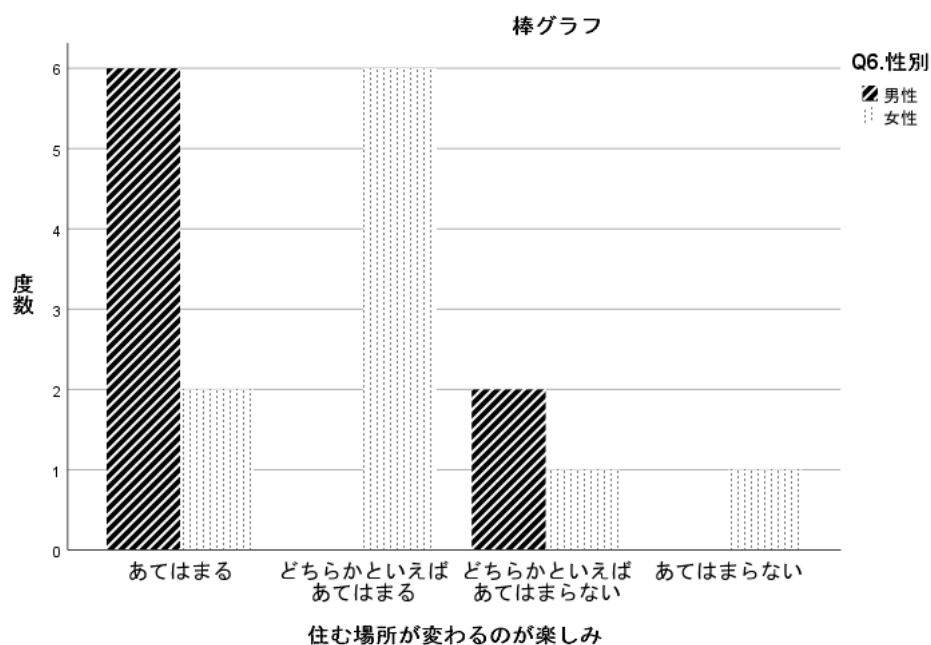
(グラフ 3 能動性得点と転校経験・家族のかじとりの相互作用)

能動性得点に関して、「転校経験・家族のかじとり」の交互作用に 5%水準で有意差がみられた ( $F(3, 53)=3.284, p<.05$ )。グラフが示すように、転校経験のない人々は家族のかじとりがてんやわんやであるほど能動性が増加するのに対し、転校経験のある人々は家族のかじとりが融通なしであるほど増加する傾向があることが読み取られる。今回は両者が中庸である場合にも差が出ているが、増加する家族システムの要因が転校経験によって変わることがわかる。

### 5.3 転校経験の意味づけ

#### 5.3.1 居住環境の変化に対する期待

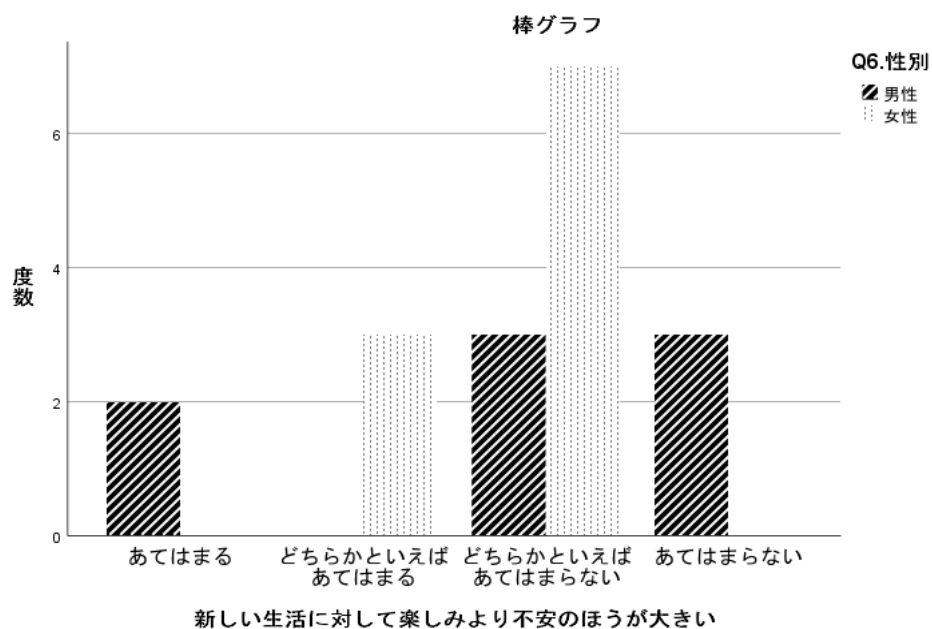
(グラフ4 居住環境の変化に対する期待と性別の連関性)



性別で居住環境の変化の評価について連関性を見るためにカイ 2 乗検定をおこなったところ有意であった ( $\chi^2=9.225, df=3, p<.05$ )。グラフが示すように、男性は女性に比べて居住環境の変化に、より期待していることが読み取れる。くわえて、男性も女性もおおむね居住環境の変化に期待しているといえる。

### 5.3.2 新しい生活に対する期待

(グラフ 5 新しい生活に対する期待と性別の連関性)



性別で新しい生活への期待について連関性を見るためにカイ 2 乗検定をおこなったところ有意であった ( $\chi^2=9.495$ ,  $df=3$ ,  $p<.05$ )。グラフが示すように、女性は男性に比べて新しい生活に対する不安が少ないことが読み取れる。くわえて「新しい生活に対して楽しみより不安が大きいか」という問いに対して「あてはまる」と回答した女性がないことがわかる。

## 6 考察

### 6.1 転校経験による人間力の影響における考察

まずグラフ1で、転校経験が人間力に及ぼす影響の性差を示した。分散分析を用いて作成した折れ線グラフによって、先行研究と同様に「男女で転校経験が与える影響が異なる」ということが明らかになった。先行研究では自己効力感とソーシャルスキルの観点から分析しているため、人間力とは焦点が異なるが、「成長する過程における日常的・持続的な環境要件によって決まる部分が多い」（本田 2005）という意味合いでは、同じポスト近代型能力のひとつと捉えることができるだろう。ポスト近代型能力は個々人の生来の資質、家庭環境という要素が重要であるため、本調査をおこなう前には性差はあまり関係ないと考えていたが、先行研究の結果と本調査の結果を合わせることで、性差が生じる可能性を見出すことができる。

本調査の結果により、女性は転校を経験することによって人間力を増加させる傾向がある一方で、男性は転校を経験することで人間力が低下する傾向にあることが示された。男性は転校という周囲の環境の変化によって人間関係が新しくなることがストレス、つまり危機と捉えるのに比べ、女性は転校経験を新しい環境における人間関係の築き方を身に付け、その結果人間力を身につけるきっかけ、つまり転機だと捉えるのではないだろうか。くわえて人間関係の築き方においては、男性が「目的（要件）を伝えるためのコミュニケーション」（松田哲 2015）であるのに対し、女性が「周囲との関係を大切にするため、直接的なコミュニケーションを避け、相手に感じ取ってもらうようなコミュニケーションスタイル」（松田 2015）であるという、コミュニケーションスタイルの性差も影響していると考えられる。

### 6.2 創造性得点における考察

グラフ2では、転校経験・家族のかじとりの相互作用と個々人の創造性の関連を示した。分散分析を用いて作成した折れ線グラフによって、「転校経験のない人々は家族のかじとりがてんやわんやであるほど創造性が増加するのに対し、転校経験のある人々は家族のかじとりが融通なしであるほど低下する傾向がある」ということが明らかになった。ここから考えられることは、転校を経験しない、つまりずっと一定の場所で生活することで環境の変化が起こらない人々は、家族のかじとりがてんやわんやであることで自分をしっかり持ち、創造性が育まれるのではないかということである。先にも述べているが、家族のかじとりとは「状況的・発達のストレスに応じて家族（夫婦）システムの権力構造や役割関係、関係規範を変化させる能力」（立木 1999）である。転校とは、家族全体で対処することができる状況的ストレスということができる。このような家族全体で一致団結し、引っ越し準備や新しい環境に適応していく機会がない、つまりは転校経験のない人々は、家族全体で状況的ストレスに対処した経験が転校経験のある人々より少ない。その結果、家族のかじとりが極端に弱い状態、つまり「てんやわんや」である人々ほど、家族全体ではない個人的な状況的ストレス・発達のストレスに自分で対処していくことで創造性を育むのではないだろうか。反対に転校経験によって家族全体でストレス対処を経験した人々

で家族のかじとりが極端に強い状態、つまり「融通なし」の人々ほど、転校というストレスに対処する際の家族の役割関係や権力構造が確立していることで、自らで創造性を育む機会を失ってしまうのではないかと考える。

このように、はじめ転校経験によって培われると考えていた人間力の構成要素は、反対に転校経験によって低下していくことが示された。

### 6.3 能動性得点における考察

グラフ3では、転校経験・家族のかじとりの相互作用と個々人の能動性の関連を示した。分散分析を用いて作成した折れ線グラフによって、「転校経験のない人々は家族のかじとりがてんやわんやであるほど能動性が増加するのに対し、転校経験のある人々は家族のかじとりが融通なしであるほど増加する傾向があること」ことが明らかになった。ここでも転校経験のない人々に関しては、創造性得点に関する考察で述べたことと同じことがいえる。転校経験のある人々に比べて、家族で状況的ストレスに対処する機会の少ない転校経験のない人々は、家族のかじとりが「てんやわんや」であるほど、自分から積極的に行動を起こし、その結果能動性を育んでいると考えられる。一方で創造性と異なる結果が得られたのが家族のかじとりが「融通なし」の場合である。転校経験のある人々もない人々も能動性は増加する傾向が見られるが、かじとり次元が中庸である場合の得点と比較すると、転校経験のある人々のほうがその傾向がより強く表れていることがわかる。このことから、確立された家族の役割関係や権力構造を普段から目にしている子どもは、新しい学校において自分から行動を起こすことで役割を獲得、権力構造を把握しようとしているのではないかと考えられる。そのため、かじとり次元が「てんやわんや」である人々は転校を経験することによって、能動性が育まれると推測できる。転校経験によって能動性得点の差が表れたのは、ずっと同じ学校で生活するという不変の環境で自ら行動を起こすよりも、新しい学校という未知の世界で行動を起こすほうが使うエネルギーが大きいからであると考ええる。

### 6.4 転校経験の意味づけにおける考察

#### 6.4.1 居住環境の変化への期待

グラフ4では、転校における居住環境の変化への期待と性差の関連を示した。クロス集計を用いて作成した棒グラフによって、「男性は女性に比べて居住環境の変化に、より期待していること」が明らかになった。一方で、グラフ1の結果と合わせると、男性は女性に比べて居住環境の変化に期待しているにもかかわらず、転校経験によって人間力が低下する傾向にあるということがわかる。このことから、転校経験における居住環境の変化への期待は人間力の増加に影響を及ぼさないということがいえるだろう。住む環境が変わることに対して大きい期待を抱くことで新しい生活に期待するという内向的なことと、そこで人間関係の構築、適応という外交的なことの違いからこのような結果が見られたと考えられる。しかし男女合わせて半数以上が居住環境の変化に対して期待していることから、居住環境の変化が転校における楽しみの1つであるといえるだろう。

#### 6.4.2 新しい生活に対する期待

グラフ5では、転校における新しい生活への期待と性差の関連を示した。クロス集計を用いて作成した棒グラフによって、「女性は男性に比べて新しい生活に対する不安が少ないこと」が明らかになった。これとグラフ1の結果を合わせると、女性は男性に比べて転校にともなう新しい生活に対する不安が少ないことが、転校によって人間力が減少する男性と対照的に、人間力が増加することに繋がるといえるだろう。この結果を受けて、「女性は自身の自己効力感を転校の回数を重ねることによって高め、新しい環境に適応する自信をつける」という原田、山城(2007)の主張と同様に、女性は転校によって培われた自己効力感により、新しい生活に対する不安が男性より少ないといえることができるだろう。

### 7 結論

最後に、本研究で明らかになったことについてまとめ、本研究の課題と今後について述べる。まず、本調査において転校経験が与える人間力への影響は男女によって差が出ることを確認された。したがって、「両親の転勤に伴う子どもの転校経験は子どもの人間力に影響を及ぼす」という私の仮説は証明された。一方で、女性は転校をすることで人間力が高まり、男性は経験をすることで人間力が低下する傾向があることが調査でわかり、男女によって影響を与える方向性がプラスとマイナスで異なっていたことは先行研究と同様とはいえども新たな発見であった。転校の際には両親は子どもに対して、男児の場合は特に新しい友だちとの出会いについて「どんなお友達と会えるか楽しみだね」などと希望を持たせ不安を少しでも取り払うことが必要ではないだろうか。男性は居住環境の変化に期待していることが本調査によって明らかになっているため、出会いに対しても期待をさせることができれば、人間力の低下を避けることができるのではないかと考える。

家族システムと人間力の関連については、家族システムが中庸であるほど家族バランスが健康であるが、個々人のスキルに関しては家族システムが極端であるほど変化が見られることが示された。このことから、家族システムが極端であるほど家族内の問題が生じやすい環境ではあるが、その反面問題に対処する能力を自らで培うことができるという可能性が見出せる。くわえて、今日求められているポスト近代型能力において家庭環境という要素が重要であることが再確認できる。この家庭環境とは経済的な豊かさや両親の社会的地位の高さに還元しきれない(本田 2005)から、家族との何気ない日々のコミュニケーションが自分の人間力に対し影響を及ぼしているといえるだろう。

最後に、今後の課題について述べる。本研究では有効回答数が76と十分なサンプルが得られなかった。このため、サンプル数を拡大した場合に本研究と同様の結果が得られるとはいえない。家族システムに関しても、総サンプル数が少ないために「てんやわんや」、「融通なし」、「ベッタリ」、「バラバラ」といった極端な家族システムのサンプルが少なかったため、十分な信用性が得られなかったため同様のことがいえる。また、本研究の根本である転校経験のある回答者が76人中18名と大変少ないサンプル数であったため、今後は転校経験者のデータを最大限に収集し分析することが課題として求められる。しかしながら、転校経験者の男女比が10:8とおおむね同数であったことから性差による影響の違いを得ることができた。

今回転校経験が人間力に与える影響について取り上げた。本研究によって転校によるマ

イナスイメージを少しでも変えることができれば幸いである。転校によって人間力を完全に伸ばすことができるとは言いきれないが、この経験が人々の人間力に影響を与えることは確かであるといえるので、その具体的な方法、行動として提示することは可能か、検討を行っていききたい。

#### 参考文献

- グレン・H. エルダー, 1997, 『新装版大恐慌の子どもたち』, 明石出版.
- 本田由紀, 2005, 『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』 NTT 出版.
- 石原邦雄, 1985, 『家族生活とストレス』, 垣内出版.
- 石原邦雄, 2006, 『家族の「ストレスとサポート (放送大学教材)』, 財団法人放送大学教育振興会.
- Daniel Goleman, 1996, Emotional intelligence, 1996, 土屋京子訳, 『EQ——こころの知能指数』 講談社.
- Patrick Griffin. Barry McGaw. and Esther Care, 2011, Assessment and teaching of 21st century skills, 2014, 三宅なほみ監訳, 益川弘如・望月俊男編訳, 『21世紀型スキル——学びと評価の新たな形』 北大路書房.
- 宮本みち子・清水新二, 2009, 『家族生活研究』, 財団法人放送大学教育振興会.
- 立木茂雄, 2015, 『家族システムの理論的・実証的研究』, 萌書房.
- 原田純治、山城健, 2007, 『転校経験の影響に関する心理学的研究』, 長崎大学教育学部紀要, 3, p. 151-156
- 松田哲, 2015, 「コミュニケーションにおける性差についての考察」, 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要 8, 49-54
- 西村拓真, 2017, 『人間関係がヒューマンスキルに与える影響』, 同志社大学社会学部社会学科紀要



